



# フェローシップ・ニュース No.93



アドiksiオン関連講座No.50 2019/2/18

## 藤岡ダルクを卒業して社会復帰！

ヒサオ

特定非営利活動法人  
アジア太平洋地域  
アドiksiオン研究所

発行日  
2019年3月1日

藤岡ダルクに2014年3月に繋がりました。退寮したのは2016年の7月いっぱい。その年の10月に藤岡ダルクフォーラムがありまして、仕事には12月に復帰して、クリーンタイムは来月で5年になります。5年前の2月19日に結構やらかしました。本命の薬はいわゆる危険ドラッグになります。僕はセクシャルマイノリティで男性同性愛です。それがきっかけで薬を使っていました。おそらく24、5歳から鼻で吸う幻覚剤をやりはじめてだんだんハードになって、10年くらい前から違法ドラッグを使ってました。

当時は違法ではなかったので、全く抵抗なく週末ユーザーで使っていました。そういう行為に至るときだけ使っていました。

自分はアッパー系の覚せい剤に近いものを好んで使っていたようです。週末だけ使っていたので仕事に影響ないんです。カミングアウトなんか絶対しないですし、親にバレたり職場に知られたら終わりだと思っていました。逆に週末や夜間使うことでオンオフの切り替えのできる格好の道具だと思っていました。罪悪感もなかったです。

42歳、ちょうど男の厄年、弟が亡くなって私生活もバタバタして、体調もおかしくなってきたんです。夜眠れなくなってきたんです。フラフラで仕事に行くのですが、仕事では20年選手ですからごまかしてできるんです。ちょうど仕事もキツくてなって、上になって責任もかかってくるし、半分は職場のせいかな。最初は産業医にかかって、不眠にデパスなんかのベンゾジアゼピンを処方されて飲んでいました。そのうちに精神症状が出てきたんですよ。不眠から始まって妄想、幻覚、幻聴が出てきてしまったんです。人がいるように感じたり、悪口言われてるような感じしたりした。職場も人が多いところに異動になったけど薬は止まらないし、これでもう無理だなと自分でも思って、2013年12月いっぱい仕事で休んで自宅にいました。自宅でも止まらないですよ。母親と二人だったんですけど、最高で2週間くらい止まったのかな。捨ててきたはずなのに、ちょうどいいところにあるんです。車の中にあたりしてこっそり使ったりした。2月19日に薬をドカンと使いやらかしました。昼間からこそこそ使っていて、飯食って使って、夜中にも使って、タバコ吸っていたら火がボツと付いたのがバーッと広がってきて、障子の襖が一枚燃えたかな。それで親もやばいと思って精神病院に入れられそうになった。

ダルクをなぜ知ったかという、僕の前仕事は非常に依存症に近いと言われてるんです。なぜかという、薬を扱うから。仕事関係のHPにダルクのことが出ていて、「依存症の者はDARCに通い定期的なミーティングをし、通常の業務は困難である」って書いてあって、がちんと来てね。病院も調べました。赤城高原（ホスピタル）に初め行くと思ったんです。HPに僕が使っていた薬が載っていたんですよ。いかなって思って。同時進行で仙台ダルクに相談に行ったら施設長のツトムさんに「お前薬使って3日目だろ！」「そのよれ方3日目！」って言われハッとあって、「ダルクすげっ！」とちょっと見方変わったかな。ツトムさんにすぐに藤岡の施設に電話しろと言われて。ついでだから病院受診してからダルク見て帰ってこようと思ったんだけど、それが何故か逆になって、藤岡ダルク見学した後に病院受診することになった。きっとハイパーパワーですね。

5年経って言えるのは、当時、僕早口で多動で目が血走ってて、でも仲間が話をちゃんと聞いてくれたんですよ。うれしかったですね。一方で打算もあって。仕事関係のHPに載ってたんだから、（復職する時断られたら）雇わないとは何かとあってやろうとかね。あとは家に居なくなかったんですよ。母親と一緒にいたくなかった。精神科に入れられるのも嫌で行くところもないし、まあいいかなあと考えてダルクに決めました。薬をやめようと思って繋がってないです。

それで仙台ダルクのツトムさんに「ダルクに行くことにしました」と言ったんですよ。仕事の後処理をして挨拶して片付けしてから行きますと言ったら、「今すぐ行け」と言われた。「これまで適当なこと散々やってるのに、どうしてこういう時だけ辻褃合わせようとするんだ。すぐ行け！」と。それでも後処理だけして、3月4日に行きました。逮捕されてないのに自分で来てすごいよねって施設でも言われて、自分でもレアなケースかなとも思いますが。こう言っただけで、経済的には自立してました。社会的地位もそれなりだったし、マンションも買った。でも何だか「終わったな」という感じがしていたんですよ。「もういいかな？」という感じ。死にたいとは思わなかったけど、自分で幕引きをしたい。山口百恵がさよならコンサートでマイクを置くようなイメージ。人に何かされるなら自分で決めたいと、最後まで自分が、って感じだったのかな？ そういう感じでダルクに繋がったんです。

APARIとは、アジア太平洋地域アドiksiオン研究所 (Asia-Pacific Addiction Research Institute) の略称です。

全国のDARCやMAC等の社会復帰施設、福祉・教育・医療・司法機関と連携しながら、依存症から回復しようとする方々を支援しているシンクタンクです。

### 目次：

藤岡ダルクを卒業して社会復帰…ヒサオ	1
東アジアDARS報告…尾田真言	4
家族とともに考える薬物政策のあり方…古藤吾郎	5
入寮者からのメッセージ…ケン	6
支援につなげる覚せい剤事件の弁護術(5)…高橋洋平	7
司法サポートのご案内 家族教室スケジュール	8

ダルクには薬を使って2週間くらいで行ってます。家に居ても眠れなかったんです。処方全部置いてこいって言われたから置いてきたので、1週間薬なかったんです。でも薬なしで寝られました。薬使って2週間で繋がってるから、多動だし、落ち着かないし、相当すごかったらしいです。

薬が止まってきて、振り返ると、やっぱり僕も子供の時からイケイケですよ。そういう感じが鼻につく人はいっぱいいたでしょうね。仕事してる時のオーラがなかなか取れなくて。怖がってた人もいたかもしれない。バーっと喋るから。入って1カ月でスタッフ研修で来てた方に1時間絡んだんです。あれでみんな引いちゃいましたね。自分でアピールしたいものが出てきたのかな。病気の悪いところですよ。当時のこと「怖かった」って言われましたね。「俺は繋がったばかりだから多少変なことして平気なんだ！」って言ってたそうですよ。相当したたかでしたね。

薬使うのはセックスの道具だったのですが、でも仕事のストレスも多くて。他業種とのトラブルが増えたんですよ。怒鳴ってるの好きなんですよ。材料集めてお前はここがダメだとか言うんですよ。そういうことに執心してた。徐々に薬止まってきて、人間関係のトラブル、人に対してすごく怯えてる自分がいて、仲良く喋ってても、何か言われて耳がかっと熱くなる感じとか、下っ腹の辺りがぎゅっと痛くなる感じがあって。苦手な人だけじゃなくてよく話す仲間の時でも出るんです。「祈るといいよ！」と言われて祈ったんです。相手の回復を信じさせてくださいって。よくなるんです。祈りって効くんですよ。ところがその後、効かなくなる。その後トラブルある度に祈ってたら人数が多くなってしまって、今度は「仲間」って変えたんです。すると「あっ効いた」と。でもまた効かなくなってきたら、ハッと気付いたら、僕、苦手な人は仲間じゃなかったんですよ。仲間から仲間と友達は違うんだよって言われたこともあって。人との接し方では悩みました。人と自分は違うんだってところがものすごくあったと思いますね。

半年ぐらいの時のターニングポイント。体が良くなってきて眠れるし落ち着いてきて、それで「仕事探したい」と施設長に言いに行きました。そしたら「あんたもっと真面目にやらなきゃダメだよ」と、ガツンと怒られて。でもダメだって言われただけじゃなくて、仕事してきたから社会性はあるんだから「13ヶ月ちゃんとやれ。その後スタッフ研修しろ」と。それでハッと思うところがあって、少し落ち着いたんです。「新しい生き方をしましょう」、「正直になりましょう」と施設で提案されます。僕にとって正直になるとはカミングアウトすることでした。施設入ってすぐのNAのミーティングで言ったんですよ。あれ薬効いてたから言えたんですね。自分は正直になったと思ってました。新しい生き方、例えばAとBがあって、これまで自分がしてなかったことを13ヶ月サーっとやればいいのかと軽く考えてましたね。

自分は正直になったと思ってたんです。でも今思うと、自己中心的なんですよ。「自分がこれだけのことをカミングアウトしたんだから、相手も正直に言うだろう。受け入れてくれるだろう」という独自の見方がある。優しくされたりすると、(いい奴だって)フーッといたり、(予想通りにならないと)イライラとか自分の感情を持って余しがちだった。友達なんだから僕の味方をしてくれるはず。でも相手もそんなことは決してなくて。

もう一つターニングポイントがあって、運動プログラムで僕はアキレス腱断裂したんです。エイサーデビューして、これからいろんな公演があるよという時に、最初はそんなにストレスとは思わなかったんだけど、全治3ヶ月。だんだんと精神的に追い込まれてカッコつけることができない。後から来た人がどんどんデビューしてきて追い抜かれる時の嫌な感じ。意地悪しまたね。無視したりプンプンしたり。取り繕うことができなかったんです。だからアキレス腱切って良かったと思います(病気が出せて)。あの時は自分のかさぶたが全部取れる感じですよ。突き詰めれば焼きもちですよ。体で追い込まれて、正直にならざるを得ない。かっこつけていられなくなったって感じでした。あの頃は松葉杖してエイサーしていました。周りの人はみんな引いてましたよ。

施設では僕は(12ステップを)仲間と一緒にテキスト使ってということはほとんどやらなかったですね。トラブルが起きるたびに、その都度それに対処するという感じで。喧嘩もありましたよ。殴る蹴るじゃないけど、あまりに激昂するから心理テスト受けてこいって言われたり。(精神科で)回復期のイライラで、断薬期間が伸びてきたら、落ちつくだろうと言われて、それも励みの一つだったかもしれない。

僕はエイサーがとても好きになったんです。はじめカメラマンだったんですけど、1軍と2軍みたいな気がして嫌で。目立ちたいんですね。だからデビューしたくて強迫的にやりました。夜練。自分は処方飲んでたから、薬飲んで1時間くらいで効いてくると体が動かなくなるんですよ。だから処方後30分くらいでガーッとやりました。体の中に溶け込んだ薬が出てゆく感じだったのかな。エイサーでも始まるんです病気が。「あの人からは聞きたくない」とか。「教えてください」がなかなか言えない。クールにやりたい。カッコつけてますよね。我が強いとも言われていた。自分、目つきが悪くて怖いって言われることも多いんだけど、エイサーやってる時すごくいい笑顔だねって、退寮する頃言われました。

スタッフ研修の仕事の中身は経験や年齢、能力などによって違ってたと思います。施設長からは「人の話を聞け」「相談すること」「シェアすること」と言われた。だんだんきつくなってきたのは、自分の「焼きもち」、特定の人へのネガティブな感情。ダルクだから受け入れてもらえたけど、普通の職場だったらやばかったと思います。毒を吐きまくってました。

2年ちょっといて思ったのは、自分は狂っている、ズレてる、どうも自分を痛めるようなことをしてしまう。前の職場での同僚との接し方でも、わーっと言ってしまふ。いじめみたいになる。満足感はあるけど「あの人怖い。あの人キレル」だけで何も伝わらない。



講座の様子



会場の様子

自分はズレているんだろうなと思いますね。自分なりに考えてトライするけど、また戻っちゃう。藤岡は完全に仲間はずれにはならなかった。総スカンになることはない。30人もいると誰か声をかけてくれる。トラブルが起きると「距離を取りなさい」と言われます。自分なりにそれを徹底するんですが、距離を取るが無視するに変わったんです。無視するためには、気にしていなきゃいけないので頭の中はそれで占められる。いやー参りましたね。

年下の仲間が「ヒサオさん、ヒサオさん」と声をかけてくれる。孤独はなかったです。こういうことは（ダルクに来る前は）あり得なかったです。退寮してからは施設のイベントに声かけてもらって参加したり、NAに積極的に出て行っています。

薬は、やめたほうがいいんだろうなとは思うようになりました。高慢で「施設に入ったら止めて当たり前」と思ってて。欲求が湧くことは施設にいるときはなかった。再使用はしていないけど、性格上の欠点からトラブルは多発していて依存症全開だったと思いますね。集団生活して良かったなあとと思います。

2014年4月から危険ドラッグが違法ドラッグになって。1月に薬を使って幻覚妄想状態で警察に自首したんです。たまたまセーフで。ダルクに入ってから捜査打ち切りで警察から「薬を返しますから取りに来てください」と言ってきてね。それを施設の方はハイパーパワーだ、ラッキーと言われるけどあの頃は全く響かなかった。今思うとホントにラッキーだったです。

「逮捕されないですごいね」と言われますが、「神様は自分の越えられない課題を与えない。」と先行く仲間が言ってて。もし逮捕されたら僕、ダメなんです。復職もスムーズにいかなかったし、母は年金暮らしで、住宅ローンもあったし、経済的にもアウト。逮捕されたら自分は「THE END」。そう考えると良かった。自分は逆境に弱いし、病んでる部分を抱えているし、プライド（財産）がズタズタになったら立ち直れないんだろうと思いますね。

社会復帰ですが、よくゆっくりやりましょうと言いますよね。自分なりに考えるゆっくりはやっぱり早いか無理な計画だと思います。だからソフトランディングでした。

今の仕事についてのは、昔のところに戻ってはダメというのと、主治医に前の仕事に戻るより当事者としてやっていく方がもっと役に立つのではないですか？との言葉もあって、調子にのってしまったかもしれません。今の職場は自分の依存症を知っているし、一部のスタッフも知っている。セクシャリティに関しては言ってません。前はバレたら終わりと思っていたけど今は聞かれたら言ってもいいかなあと。前は隠さねばならない、嘘をつかねばならないでした。「グレーゾーン」にしておく。これは千葉ダルクの施設長から聞いたんです。「クリーンタイムが続くと白黒つけなくてよくなるから」と。

職場で「どういう風にやっていきたいですか？」言葉が出ずに体がこわばる思いがしたり、自分のイライラを話した時に「そんなのみんな（健常者でも）ありますよ」と言われると「お前らに何がわかるんだよ」と反応していた。そういう時は考えても仕方ないので、ミーティングに行くんです。フェローシップで話したこともある。

今の職場では依存症の方もダルクの方とも接します。気をつけているのは「同族嫌悪にならない」こと。思い通りにならなかったり、自分の言うこと聞いてくれない人は嫌いになるので。仕事しながらプログラム、回復のツールを使わないとやれないと感じています。

仕事内容が変わったので、わからないことばかり。最近ようやく「わからない」と言えるようになってきて、同僚に聞きにいったって意見を聞く。上司との信頼関係もないとダメ。仕事しながらも病気がいっぱい出ますよ。聞いてばかりでもダメなので「自分ではこう思うんですけど」とつけるようにしていますが。

ダルクを出て、NAが回復の主体になってきたので、NAには真面目に行っています。1時間半かかります。交通費もかかりますが、薬使っているときよりも安いいし。週1回。前は週4の時も。地元ではなくて遠くまで行ってます。行きたくない時もあるし面倒くさい時もある。決して好きで行ってるわけではないんです。でもNAなしでは1週間トータルで持たない。イライラしてくるし、テンション高くなる。ミーティングに行くと落ち着くんです。

今の職場はフレックスタイムに近い状態に出来るので疲れたら早退したり。セルフケアに気を付けてます。家に帰っても一人なので、NAメンバーと連絡取ったり、声かけを待たず自分から行く。（NAに）行ってもツンツンしていたりもするけど。繋がりを保つために自分はミーティングに行ってますね。何とか薬を使わずにやっています。

家族教室ですから、家族のことに触れます。母子家庭で母は75歳。田舎に一人です。結婚しろと言われるのが嫌で自分から距離を取ってました。母との関係はよくなってケンカします。罵倒します。向こうも負けないです。施設出たから母との関係で変だなと思ったことは、エイサーの動画のこと。みんなは「いい笑顔してるね！」と言ってくれるのに、母は「何そんなに歯ぐき出して笑って！」と。そういう捉え方。凄く傷つきました。「普通そういうこと言わないんじゃない？」と言えました。他の人がスリッパしてるのに自分のクリーンタイムが長いのでその話をすると、「それが当たり前なんだよ！」と言われて、この人と僕は別人格だなと。そうだねってわかってもらいたかったのかもしれないです。母の言うことはみんな鼻につきます。母は体裁を整えたり事務的なことばかりで子供の時も褒められた記憶がないんです。やれて当たり前。仲間が「親に埋め合わせしたい」と言うが、自分は「これ以上悪くしない」が目標。必要最小限の付き合いです。ただ激昂してしまったら「大きな声だしてすみませんでした」と謝るようにはしました。会話でかみ合わない炎上してしまうし、「今より悪くしない」こういう感じでやっていけばいいのかなあ？

今後は、中年なので体調を整えること。仕事を始めたとき歯が痛くなったり腰痛になったり、それはストレスだったのかも。施設長に言われたのはセルフケアをきちんとやるように。休むことだったり、NAに行ったり。ただNAに強迫的に行ってるときの自分は多動かな？やりすぎない事も大事。自分も含めて依存症の人はセルフケアをやれない人たちなのかな？と感じたりしています。

明石書店より

発売！！

Amazonや全国の書店  
でお買い求めください！

ダルク

回復する依存者たち

DARC

Drug Addiction Rehabilitation Center

その実践と多様な回復支援 ダルク編

(わたしたち)を救える理念があれば、(わたし)らは自由でいられる

自助グループについての  
当事者研究の金字塔

鎌谷 晋一郎

(原稿、東京大学先端科学技術研究センター提供)

価格：2,160円

(税込み)

## 東アジア薬物依存者回復支援(DARS)養成セミナー IN 龍谷大学(京都) 報告

事務局長 尾田 真言



初日にアパリの司法サポートについて話をしました。



今回のDARSの1週間前に急遽、乙支大教授から韓国法務部の司法精神病院長に就任した韓国のチョウ先生。20年ぶりに元の職場に戻られました。もう17年のお付き合いになります。



近藤恒夫とレニール・クリストバル氏。2人の関係は20年前にアメリカで開催された自助グループの国際大会までさかのぼります。2008年から3年間JICAプロジェクトではカウンターパートとして密接に連携していました。

私たちがDARS (Drug Addiction Recovery Supports 薬物依存者回復支援者育成セミナー)の活動を始めて10年になります。2/23(土)と24(日)の2日間、京都の龍谷大学で東アジアDARS が開催されました。今回の登壇者は海外から10名、国内から私を含めて15名でした。この業界に20年いる私にとって、登壇者のほとんどは10年以上付き合いのある人たちで、お互い回復支援の仕事をし続けてきたことが楽しくあっという間に終わった2日間でした。テーマは民間団体による回復支援のスキームを東アジア地域で展開しようということでした。刑事司法制度において拘禁刑を科すだけの厳罰主義ではコストがかかるばかりで効果が少ない。病院や回復施設などの社会資源を活用する道をどのように開いていけばよいのかといったことが根底にあったセミナーだと思います。

フィリピンのレイエス次官の話は、ドゥテルテ大統領の就任後、160万人の薬物乱用者が処刑をおそれて自首してきたが、そのうち9万人以上が地域のコミュニティー・ベースの外来プログラムに参加し、6000人が入寮・入院治療している。自首のきっかけは恐怖だったが、自発的に始めたわけではないプログラムがどういう効果をもたらすかは、現在検証中ということです。ちなみにフィリピンの法律で末端の自己使用事犯者を死刑にする規定はありません。

韓国のチョウ医師の報告では、2000年以前は薬物事犯者に治療の概念はなく、刑罰が科せられていただけだったが、チョウ先生らが法執行機関に対して薬物依存が脳疾患であることを教育したことで、治療の必要性が理解されるようになりました。法務部の病院に症状に応じて2か月から1年間入院することを条件に起訴猶予にする、いわゆる入口支援が行われています。

タイのタニヤラックコンケン病院のチャンチャイ・トングプラニット医師からは、タイの薬物事情の紹介がありました。タイでは15錠以上の錠剤型覚醒剤(ヤバー)の所持は営利目的とみなされます。2018年には23万人が薬物依存治療を受けたが、任意に治療を受けたのは11万人、強制的な治療が9万人、受刑者が3万人。年齢は18才から24才が最も多く、次に14才から17才。日本に比べて低年齢という特徴があります。

台湾のCTBT(中国信託反毒教育基金會)というNPOで政府と民間のプログラムの橋渡しをしているコリー・ジェン氏からは、かつては司法省において法執行の対象だった薬物政策が現在では保健省による健康と福祉の問題にシフトしてきていること、CTBTでは教育・啓蒙活動を行っていることが報告されました。規制薬物の臭いを体験できる展示などもしているそうです。

スペインのプロジェクト・オンブレ・ジャパン設立準備委員会の近藤京子氏からは、スペインで1984年に開設され、現在27支部ある非営利組織のプロジェクトオンブレ(直訳すると、人間計画)の紹介がありました。そこでは「病気」や「回復」という言葉は使わず、薬物使用を表に現れた「兆候・症状」のひとつとして捉え、アディクションではなく人に焦点を当てる方法が採られていること。スタッフ1120人とボランティア2403人で、2017年には1万8788人のクライアントとその家族に対応したそうです。

タイもスペインも日本とは規模が違うほど多くのクライアントに対応していると感じました。

紙面の関係で海外の取り組みについての報告からご紹介しました。



2017年タイDARSからお付き合いのあるマヒドン大学のプラパンプン博士とコンケン病院のスタッフたち。右端はその時一緒に参加した精神科医の長谷川直実先生。左端は2年前にはマヒドン大学の大学院生だった猪浦智史氏(国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所)



左写真  
左から、レニール・クリストバル氏(フィリピン・ファミリー・ウェルネスセンター代表)、マリアノ・ヘムブラ医師(フィリピン・精神科医)、チョウ・ソンナム医師(韓国・国立司法精神病院長)、私、ベンジャミン・レイエス次官(フィリピン・危険薬物委員会)



2日目のえんたぐの様子。一人の抱える問題を輪になって皆で共有し考える場です。



DARSの会場の様子



初日の懇親会の写真  
フィリピンからの3名、タイからの3名と一緒にテーブルでした。

アディクション関連講座No.49 2019/1/21

## 家族とともに考える薬物政策のあり方

日本薬物政策アドボカシーネットワーク 古藤 吾郎

「周りにわかってもらえない」、「親しい人に話せない」、「(子どもの話に)踏み込んでもらいたくない」、「(自分の子は)普通の子ではない」、「犯罪者扱いされる」…。これは薬物依存症を抱える子を持つ母親たちの声です。家族という立場で困っていることは何かという問いかけに対する回答でした。

1ヶ月ほど前、「家族教室/アディクション関連講座」で“薬物対策の自由研究”と題したワークショップをおこないました。最初に、ご参加くださった家族の方々に、この困りごとを共有しました。続いて、3グループに分かれ、各グループがひとつの国という設定とし、次のような薬物を使用する4人がそれぞれの国でどのような状況になるのか、どのように取り扱われるのか、自由にデザインしそれを共有しました。その4人とは、①処方薬を大量に使用する40代の人、②長年、大量に常習的に飲酒する50代の人、③覚せい剤を10代の頃から使うことがあるシングルマザー、④大麻を2・3回だけ手にしたことがある20代の学生、です。

まず、①と②については共通して、保健教育や依存症の知識が国民レベルで普及、医薬品の処方に対する適切な管理体制、本人や家族に24時間・無料で対応する相談先の設置、などの政策がデザインされました。そして、③・④では、犯罪にするのかどうか決めかねる、母子に対する支援の充実を図る、犯罪が抑止力になるので刑罰を与え、同時に生き方や手厚い支援を提供する、という対応が挙げられました。

私も、4番目の国として実例をもとに、規制はあるけど刑罰を与えず、地域の保健や社会福祉サービスにつなげる政策をしているという国を挙げました。というのも、冒頭に共有された困りごとというのは、実質的には子どもが依存症であることに由来するのではなく、特定の薬物使用を犯罪として処罰を与えていること、また社会的に抑止力として薬物使用が重犯罪であると普及させていることに由来するし、そのために、本人・家族をはじめ身近な人たちは孤立してしまうという状況が生まれていると考えられるからです。自分の家族がある病気にかかっていることを必死に隠そうとしなければならないということは、その病気に対するスティグマ（あるいは差別と偏見）があるからです。薬物使用が善悪の悪とみなされるのでそうした事態が生じるのでしょうか。だから、善悪ではなく健康問題として捉える政策が切望されます。国によってさまざまな対策があり、正誤の区別ができるものではありません。ただ、今抱えている困りごとが少なくなるような政策とは何であるか、あらためて考えてみることでワークショップを終えました。

では、ここで日本の薬物政策の近年の動向に着目します。昨年8月、日本の薬物政策を示す「第五次薬物乱用防止五か年戦略」が発表されました。厚生労働大臣が議長を務める会議のもとで作成され、その中心を担っているのが厚生労働省の監視指導・麻薬対策課です。そのなかで依存症の治療と支援について触れているものの、全体的な取り組み姿勢は犯罪重視型です。「末端乱用者に対する取締りの徹底」が目標とされ、健康や人権の問題として捉える姿勢（ハームリダクション）を否定し、処罰重視への理解を国際的に求めていくことが示されています。

一方で、薬物対策も含む「再犯防止推進計画」が昨年12月に発表されました。これは法務省が中心になって作成したものです。ここでは、法務省と厚労省は、薬物事犯者の再犯防止対策として、海外における「各種拘禁刑に代わる措置」を参考にして、効果的な方策を検討していくことが明記されています。つまり、拘禁するような処罰を見直す可能性が秘められているのです。日本の薬物対策は少しずつですが多様化しています。

私はより健康や福祉を重視した薬物政策が展開されていくことを目標にして活動しています。これまでの処罰重視の政策により、社会が良くなっているとその効果が科学的に実証されているのであれば、この活動をする必要がないでしょう。しかし、実際には処罰で良くなる方向には向かっていなかったため、政府は少しずつ処罰とは違う対策も導入し始めています。私がこの活動に励む理由の一つは、犯罪化により孤立し、状況が悪化し、苦しむ薬物依存症者の家族たちの声を聞くからです。国際的にもこうした声が高まっていて、変化を見せています。3月には、世界の薬物対策のあり方について議論される国連の会議が開催されます。国際的な動向にも注目です。



朝日新聞GLOBE+  
(<https://globe.asahi.com/>)  
特集:「麻薬」のある世界  
“薬物依存の当事者が語る 日本でもできる「ハームリダクション」とは”

日本薬物政策アドボカシーネットワーク（通称：NYAN）は、健康と人権に重点を置いた薬物政策の発展を目指すプロジェクトです。当事者、家族、保健・医療・福祉、司法等の専門家を中心に少しずつ活動を広げています。アパリに事務局を置いています。



ハームリダクションについてまとめた本を、古藤が松本俊彦先生、上岡陽江さんと共同で編集しました。『ハームリダクションとは何か 薬物問題に対する、あるひとつの社会的選択』  
中外医学社  
2,592円(税込)

## 藤岡ダルク 入寮者からのメッセージ

### 「依存症のケンです」

ケン

NPO法人アパリは、群馬県藤岡市にある藤岡ダルクを運営しています。同施設の入寮者からのメッセージをお届けします！



はじめまして藤岡ダルク入所者のケンです。刑務所から直接つながり7ヶ月になります。自分の薬歴について書かせて頂きます。最初の薬物使用は中学3年生頃だったと思います。今は52歳ですので今となってはだいぶ昔のことです。最初のきっかけは、当時の自分は不良グループに入っており、そのグループ内で飲酒、喫煙、万引き、喧嘩、バイクの窃盗等、大体不良と呼ばれる事を経験しました。そのひとつにシンナー吸引がありました。

今だから言える事ですが、当時の自分から見て不良の人は、とても格好よく見えていました。でも当時の不良は見た目だけではだめで、格好よくいたければ仲間と同じように、悪い事もやらなければだめでした。本音を言うと、自分は出来ればあまりやりたくなかったように思います。当然シンナーについても、脳が縮んで馬鹿になると聞いていたので、吸うのは避けていたのですが、それでは格好がつかないので、結局みんなと一緒に吸うようになりました。

シンナーをやるようになってからは、体に悪い事など気にしなくなっていました。自分の使い方は一人で吸ったりせず、みんなと一緒に吸う。自分でシンナーを調達するのではなく誰かが持ってきたシンナーを吸っていました。アルコールも飲んだりはしていましたが、自分の体には合いませんでした。飲むと心臓がすぐにバクバクしてきて、顔も真っ赤になり、さらには頭が痛くなって、最後には気持ち悪くなってしまい、あげくには吐いてしまう。そんな感じでした。自分にとっては、アルコールよりもまだシンナーのほうが、体に合っていたように感じました。でもビニール袋の下の一方の角を結んで、2センチほどシンナーを入れ、そのシンナーを吸いきった時には頭が痛くなっていました。ただシンナーを吸った時の、幻覚が見えたり、体がフワフワしたり、ぶっ飛び感じが楽しくてみんなとしばらくの間やっていました。

16歳になってバイクの免許を取り、仲間と暴走族に入りました。自分としては入ったつもりはなかったのですが、一緒に遊んでいるうちに自然にメンバーに入っていました。楽しく暴走していたのですが、すぐに共同危険行為で免許取り消しになってしまいました。逮捕されることがいやでバイクを売却し、暴走族もやめました。

バイクの次に興味を持ったのが、先輩がやっていたサーフィンでした。サーフィン自体に惹かれたというよりも、サーファーに憧れてサーフィンを始めました。先輩にサーフィンと大麻を教わりました。シンナーについては卒業していて、シンナーから大麻と薬物が変わっていきました。

自分にとっての大麻は、シンナーと比べてたいしたことないものでした。シンナーのようにすぐにぶっ飛びわけではなく、幻覚も見えなかったのでそう思いました。お酒ほど気持ち悪くなったりせず、楽しい気分になる事ができる自分にとってはいいものでした。

19歳の時、仲間の何人かは覚醒剤に手を出していました。覚醒剤については当時、テレビのコマーシャルでやっていた「覚醒剤やめますか？人間やめますか？」に加え、「注射器」のイメージが悪くて、何度か仲間から誘われましたが断っていました。しばらくして覚醒剤をやっていた親友が原付バイクでトラックにひかれて死んでしまうということもありました。当時の自分は覚醒剤には手を出さないでいられました。

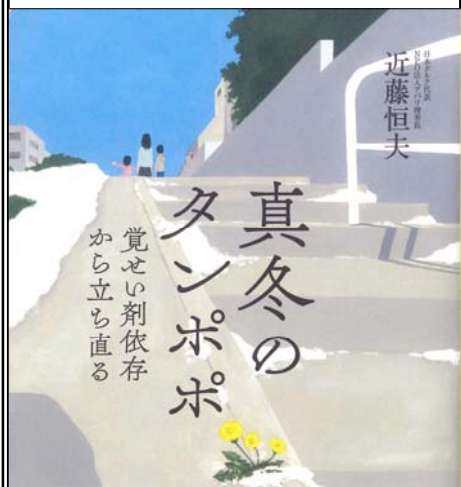
覚醒剤については、23歳位の時に仲間が大麻と一緒に「スピード」と言って白い粉を持ってきて、それをアルミホイルにのせライターであぶり吸引していました。自分も手軽な感じで一緒に吸ってみました。最初の感覚は大麻でダウンしかかたら「スピード」でしゃきっとするという使い方をしていました。しばらくの間、「スピード」＝「覚醒剤」とはわからず使っていました。覚醒剤だとわかって自分には覚醒剤の本当の怖さは解ってなかったと思います。上手く使えていたように思います。

スノーボードやサーフィンに行くときには必ず覚醒剤を吸っていました。疲れずに長い時間集中して遊べるので使っていましたが、頻繁にトイレなどに行って吸わなければならず、それが面倒くさいな、と思っていました。そんな時に売人をしている友人から吸うのも注射で打つのも体に入ってしまうえば同じ。さらに注射で打てば効能が十時間はもつと教わり注射器を使って使用するようになりました。友人から勧められたので抵抗なく注射することが出来ました。

### 「真冬のタンポポ」

■発行：双葉社

価格：1,400円（税別）



清原和博、ASKA、清水良太郎…  
第1章「芸能人と覚せい剤」を追加収録  
「何度つまずいてもいい。  
人生に失敗なんかいいんだ」  
ダルク代表が伝える「自分の痛み」に寄り添うことの大切さ

ロングセラー  
『拘留所の  
タンポポ』  
改訂版

※全国の書店またはAmazonでお買い求めください。

※FAXでの注文も承ります。

FAX：03-5312-7588

ご注文の際には、住所、氏名、電話番号を記入し、日本ダルク事務局まで。

スノーボードやサーフィンに行くときは仕事終わりに、そのまま寝ずに遊び、遊んだ次の日も仕事の疲れと筋肉痛を消すのに使用していました。睡眠不足になりましたが、休みの日に一日中寝ることでなんとか調整していました。でも疲れは完全にはとれず、又覚醒剤を使用してしまっていました。覚醒剤を止めるにも、仕事に行くために体と気分が、かたまりて使用してしまう。そんな事を繰り返していくうちに、このループから抜け出せなくなり、「自分の体はこのままで大丈夫なのか？」とも思いながらも気がつけば約15年も使用していました。

使用を始めて15年目にして逮捕されました。最初の逮捕の時は思っていたよりも早く出られたので、あまり反省することもなかったです。執行猶予期間中だということも忘れてすぐに使用してしまいました。

そして3年後に2回目の逮捕。その時初めて事の重大さに気付きました。面会に来てくれた妻が、「私は悲しい」と言い、「生活はどうするの?」と言った時に自分にはどうする事も出来ず、暗い気持ちになったことをはっきりと覚えています。覚醒剤を使うことに対して、自分のお金で買って、誰にも迷惑をかけてないからいいだろうと思っていました。ただ捕まってはいけないとは思っていました。逮捕される事に対して現実味が持てなかったです。逮捕されてしまった途端に、自分の周りの家族、友人、そして職場の人々など、多くの人に多大な迷惑をかけてしまった事に気付かされました。特に妻や子供には恥ずかしい思いや悲しい思いをさせてしまったと思い、本当に悪い事をしたと後悔と反省することが出来ました。

今は施設でミーティングやプログラムなどを受け社会復帰を目指しています。自分のやってしまった過去の出来事を変えることは出来ないが、この先の行動については自分が変えることができる！施設の中にいると不思議と薬の欲求も感じず、毎日楽しく過ごすことが出来ています。施設を退寮した後もこの状態でいられれば薬を使わずにいられると思えますが、その反面で退寮した後に、薬を使わずに生きることに不安も感じます。出た後が自分にとっての正念場。そのために施設にいる期間は目一杯シラフを仲間と共に楽しんでいきたいと思えます。



仏画プログラムの様子



アートプログラムの様子

## 支援につなげる覚せい剤事件の弁護術（5）

嘱託研究員・弁護士 高橋 洋平

今回は、Kさんという方を紹介します。Kさんは、ダルクで出会った方でその時は入寮期間1年ほどで、すでに他の入寮生をお世話する役割をしていました。とても真面目な彼はその役割を頑張りながら、エイサーにも一生懸命取り組んでいました。夏の暑い日に大きな旗を持ちながらエイサー演舞に真面目に取り組んでいたのが印象的でした。そんなKさんですが、ダルクを飛び出した後、薬物事件を起こし、刑務所に行くことになってしまいました。

先日、面会に行きました。「元気かな」とか思いながら。面会室にやってきたKさんは、まさか私が面会に来るとは思ってなかった様子でとても驚いた表情でしたが、次の瞬間にはとてもこやかな笑顔になっていました。私にとっても久しぶりに会うKさんとの楽しい面会の時間になりました。出所後のことはいくつかの選択肢を考えているようでしたが、やはりダルクの仲間には会いたいと言っていました。

出所後のことについてはKさん自身が決めていくことにはなりますが、やはり刑務所生活が長くなるとそれだけ社会との断絶が続くわけで、その結果、社会の中でうまく対応できなくなるという悪循環が起こっているように思います。確かにちょっと不器用で何か悩みがあるとうまく対応できなくなるかもしれませんが、普段はとても真面目な彼なのです。そんな持前の良さを大切にしてくれる社会であればいいのですが、現実はその甘くはありません。

刑務所面会でいつも感じることは、誰もが今度こそ失敗しないように頑張っていこうと思っていることです。それは出所しても同じだと思います。しかし、いざ出てみたら社会は簡単に受け入れてくれるでしょうか。悩みはより多く深くなっていることでしょうか。

支援する側にできることは、そんな悩み多き深き本人が自分らしい生き方を見つける旅路にほどよい距離感を保ちながら伴走していくことでしょうか。

後日、丁寧な御礼の手紙をいただきました。また笑顔の素敵なKさんに会える日を楽しみにしています。そして、また一緒にエイサーができる日を心待ちにしているところです。



特定非営利活動法人  
アジア太平洋地域アディクション研究所

○アパリ東京本部  
〒162-0055  
東京都新宿区余丁町14-4  
AICビル1階  
電話：03-5925-8848  
FAX：03-5925-8984  
Email：info@apari.jp

○藤岡ダルク  
〒375-0047  
群馬県藤岡市上日野2594番地  
電話：0274-28-0311  
FAX：0274-28-0313  
○入寮費：月額13万円+生活費  
1日千円（初月のみ14.5万円）  
（税別）  
\*生活保護の方も可能  
○入寮条件：薬物依存症から  
回復及び自立をしようとして  
いる本人。男性のみ。  
○入寮期間：個人により差が  
あります。

○木津川ダルク  
〒619-0214  
京都府木津川市木津内田山117  
番地  
電話：0774-51-6597  
FAX：0774-51-6597  
○入寮費：月額16万円  
（初回20万円別途必要・税別）  
\*生活保護の方も可能  
○入寮条件：薬物依存症から回  
復及び自立をしようとしている  
本人。男性のみ。  
○入寮期間：個人により差があ  
ります。

ホームページをぜひご覧ください。  
<http://www.apari.jp/npo/>  
Facebookもやっています！

発行者：近藤恒夫  
編集責任者：志立玲子  
平成31年3月1日発行  
定価 1部 100円

## ＜司法サポートのご案内＞

《薬物事犯で逮捕された刑事被告人に対する支援》

薬物犯罪で逮捕されたら刑務所に行くか、再犯防止に向けた何の取り組みもないまま執行猶予の判決を受け、また薬物のある日常に戻るしかない日本において、はじめて刑罰以外の再犯防止に向けた取り組みです。

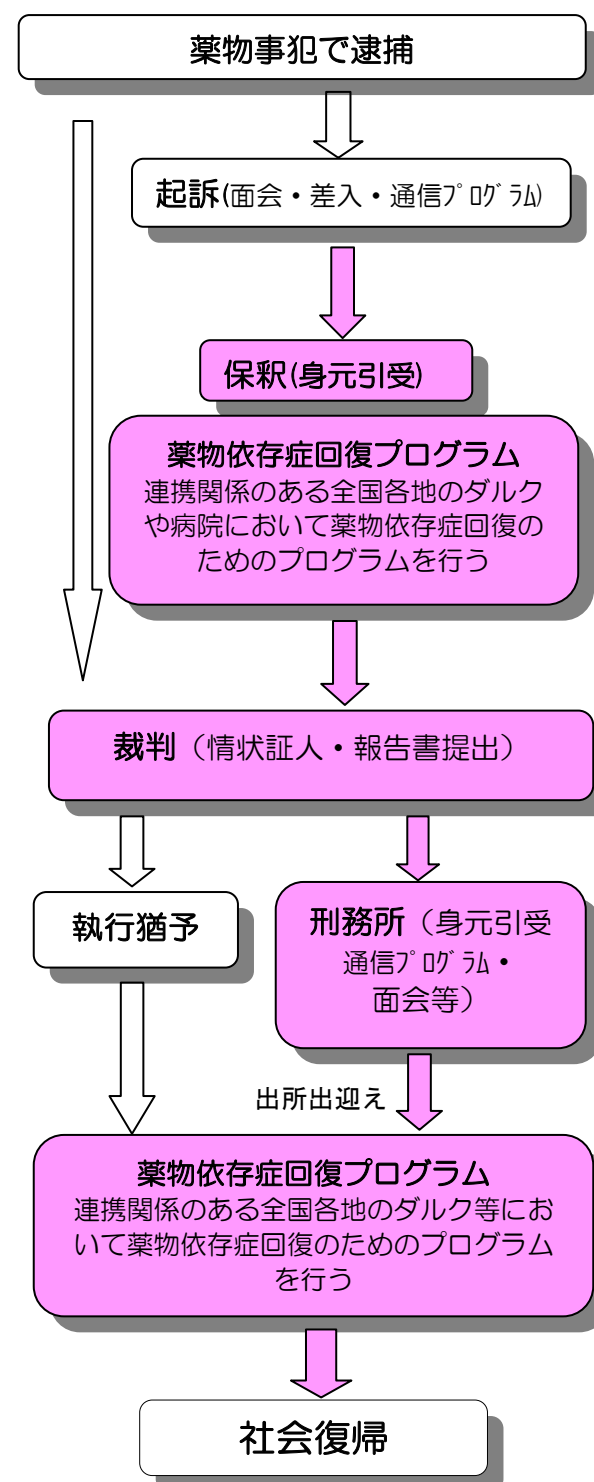
保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム、情状証人出廷、上申書作成、入寮契約、身元引受契約、出所出迎え、法律相談などあらゆるニーズにお応えします。なお、アパリの司法サポートを利用された方の再犯率は10%以下です。裁判中のプログラムの提供、受刑中の身元引受、出所出迎えに行ったりハビリ施設に繋げるお手伝いをします。

ギャンブルの問題が原因で逮捕された方やクレプトマニアの方の司法サポートも行っています。（窃盗、横領、詐欺等）ご相談ください。

[費用:コーディネート契約料として一律20万円（税別）。交通費・宿泊費の実費が別途必要です]

【お問合せは東京本部まで】

## アパリの支援



## ＜アパリ家族教室スケジュール・東京＞

第1月曜	連続講座	第3月曜	アディクション関連講座
3/4(月)	第1回 薬物依存症によるダメージと回復	3/18(月)	家族のための12ステップ講座 ステップ10,11,12
4/1(月)	第2回 薬物の欲求と「きっかけ」「危険な状況」への対処について	4/15(月)	No.51 蜂谷 嘉治氏 (警視庁組織犯罪対策第5課) 「逮捕するだけが刑事じゃない！ ノードラッグスの歩み」
5/13(月) ※変更	第3回 薬物依存症の心にある2つの考え	5/20(月)	No.52 近藤 恒夫 「なぜ私たちはここにいるのか？」
6/3(月)	第4回 本人・家族の心の成長-自立心・自尊心を伸ばす関わり	6/17(月)	家族のための12ステップ講座 ステップ1,2,3
7/1(月)	第5回 気持ちの回復:家族自身の気持ちと本人の気持ちの両方を大事にする	7/22(月) ※変更	未定

### 【対象】

○連続講座(全8回)は家族のみが参加可能で、どの回からも参加できます。

○アディクション関連講座はどなたでも参加できます。

【時間】18:30～20:30 【場所】アパリ東京本部 AICビル1階 ミーティングルーム

【参加費】3,000円（2名以上の場合は4,000円）【申し込み】不要